様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１３３７

研究課題名（和文）エジプト、北サッカラ遺跡における新王国時代墓地の総合的調査研究

研究課題名（英文）North Saqqara New Kingdom Necropolis Research Project

研究代表者
河合　望（Kawai, Nozomu）

金沢大学・新学術創成研究機構・教授

研究者番号：００４６００５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、エジプト有数の墓地遺跡であるサッカラ遺跡の新王国時代の墓地を発掘し、出土した遺構や遺物を学際総合的に調査研究を行うことを目的としていた。2019年にエジプト考古省から許可が得られ、発掘調査を行なった結果、紀元前１世紀から紀元後１世紀に年代づけられるグレコ・ローマン時代のカタコンベ（地下集団墓地）をほぼ未盗掘の状態で発見した。これは、サッカラ遺跡だけでなくナイル川流域における初のグレコ・ローマン時代のカタコンベの発見であった。この発見の翌年2020年よりコロナ禍が始まり、調査の延期を余儀なくされたが、2023年2月に調査を再開し当時の埋葬習慣を明らかにする極めて貴重な資料が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果は、エジプトにおけるグレコ・ローマン時代の埋葬習慣および来世観についての極めて重要な新知見をもたらした。特にカタコンベ内部の広間および側室の埋葬は、埋葬時からほぼ手付かずの状態で出土し、最初の埋葬から数期に渡って追葬されている様相が明らかとなった。また、これらはミイラ化の遺体処置から単純に遺体を墓に埋葬する葬法への変化が通時的に確認することが可能な稀有な事例である。またテラコッタ製像やギリシア語碑文が刻まれたステラなどの遺物からエジプト文化がギリシア・ローマ文化を受容し、変容していった様相が看取される。これらのデジタル記録は今後の文化遺産の活用の点で大きな可能性がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to excavate a New Kingdom cemetery at Saqqara and to conduct a comprehensive interdisciplinary study of the excavated remains and artifacts.In 2019, we discovered a Greco-Roman catacomb (underground mass grave) dating to the 1st century B.C.-1st century A.D. in an almost intact state instead of New Kingdom tomb. This was the first discovery of Greco-Roman catacombs in the Nile valley as well as the Saqqara necropolis. In 2020, the year after the discovery, the Covid-19 pandemic began and the research had to be postponed, but it was resumed in 2023 and extremely valuable data was obtained that clarified the burial customs of the time indicating the transition from the mummification to the simple burial.

研究分野：エジプト考古学

キーワード：エジプト　考古学　サッカラ　グレコ・ローマン時代　カタコンベ　埋葬　墓地　保存修復

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

サッカラ遺跡は、古代エジプト王朝時代の開闢より首都となり行政・経済の中心であったメンフィスの主要な墓地が形成され、エジプト考古学の黎明期より各国隊によって調査が継続されてきた。従来のサッカラ遺跡での考古学的発掘調査は、初期王朝時代や古王国時代のピラミッドやマスタバ墓で重点的に実施され、新王国時代の墓地については20世紀末になってようやく発掘調査が実施されるようになった。一方で、新王国時代の国家神アメン信仰の中心地であるテーベのネクロポリスの調査は 200 年におよぶ長い歴史があり、従来の新王国時代史は主にテーベの豊富な資料を基に構築されてきたと言っても過言ではない（河合 2017，2020）。このような状況に鑑みて、サッカラ遺跡において新王国時代の墓地の調査がさらに進展することが期待されている。

図１　北サッカラ調査区周辺地図

２．研究の目的

（１）当初の研究目的

以上のような問題意識から、2015 年度からサッカラ・ネクロポリスにおける新王国時代の墓地をテーマとした調査研究を開始した。これまで踏査、測量、物理探査を行い、その結果、新たに新王国時代の墓地を確認するとともに、北サッカラ台地の東斜面（図１参照）に未発見の新王国時代の岩窟墓群が存在する可能性が高いとの結論に至った（河合他 2017a，2017b，2018a）。そして、2017 年に同地区において試掘調査を実施したところ、新王国時代第 18 王朝の遺物が出土し、付近に近年の撹乱を受けていない遺構が存在することが推定された。この成果を受けて、本研究では北サッカラ遺跡の新王国時代墓地で本格的な発掘調査を開始し、ここから出土する新発見の埋葬資料、物質文化、文字資料、図像資料によって、これまで偏りのあった新王国時代の資料を補完し、当該地域における古代エジプト新王国時代の埋葬習慣や歴史、文化についての学際総合的な解明を目指すことを目的とした。

（２）本研究での新たな研究目的

本研究により 2019 年度に発掘調査を実施し、当初目的としていた新王国時代の岩窟墓の発見には至らなかった。しかし、発掘調査の過程でエジプトのナイル川流域の遺跡で初の発見となる紀元前１世紀から紀元後１世紀に年代づけられるグレコ・ローマン時代のカタコンベ（地下集団墓地）をほぼ未盗掘の状態で発見し、カタコンベの調査が本研究での新たな課題となった（河合他 2020b，河合他 2020b，Kawai 2020，Kawai 2021）。

2020 年からの新型コロナ・ウィルスの世界的なパンデミックにより調査の実施が困難となり、2023 年 2 月から 3 月にかけてようやく調査を再開することができた。本研究では、グレコ・ローマン時代のカタコンベの調査、記録、保存修復を実施した。

３．研究の方法

（１）考古学的発掘調査

本研究では第１に北サッカラ遺跡の東側斜面の１区画の考古学的発掘調査が主要な研究の方法である。考古学的発掘調査で明らかになった遺構、遺物を考古学者のみならず、形質人類学者、動物骨の専門家、建築史学者、文献学者、物質科学者などの専門家が分析し、古代エジプトにおける埋葬文化を多角的に明らかにすることを目的とした。また、検出された遺構、遺物は、複数の保存修復の専門家によって分析と実際の保存修復作業が実施された。

（２）形質人類学的研究

本研究による発掘調査では、数十体以上の人骨やミイラが出土した。これらから得られる性別、年齢、疾患、外傷の情報から埋葬の特徴のみならず当時の社会や生活についても重要な知見を得ることができた。

（３）碑銘学的研究

本研究では、グレコ・ローマン時代のカタコンベを発見したことから、ギリシア語の碑文史料が多く出土し、ローマ支配時代のエジプト史の専門家がギリシア語碑文の解読をおこなった。

図２　北サッカラ遺跡カタコンベ周辺

図３　カタコンベ周辺平面

（４）デジタル・ドキュメンテーション

本研究で発見されたグレコ・ローマン時代のカタコンベはほぼ未盗掘の状態であったことから、最新の 3D デジタル技術を駆使した遺構、遺物の記録をおこなった。3D レーザースキャンニングは凸版印刷株式会社の協力を得て実施し、フォトグラメトリ（写真測量）も行った。これらの詳細なデジタル記録によりヴァーチャルリアリティによる古代の埋葬の諸段階が復元可能となる。

４．研究成果

（１）グレコ・ローマン時代のカタコンベの発見

本研究での最大の成果は、ほぼ未盗掘で検出されたグレコ・ローマン時代のカタコンベの発見である。カタコンベは、北サッカラ台地の東斜面の標高 40～45m あたり穿たれた岩窟墓である（図１、図２、図３）。その中心軸は北東から南東方向に伸びており、岩盤に穿たれた岩窟部とそこに至る通廊から構成されている。通廊は、長さ約 9m、幅は約 1.2m である。通廊の入口は矩形の日干レンガ製の壁体に囲まれ、床面には石灰岩のブロックが敷き詰められ、途中から階段となっている。階段が始まるあたりから壁体も石灰岩製になり、途中から日干レンガ製のヴォールト天井に覆われていた。ヴォールト天井に覆われた通廊の内部については、層位の観察から、石灰岩の壁と日干レンガの天井が作られた後に、少なくとも一度崩落し、少し砂が堆積する時間をおいてから、再度、壁や天井が再建され、通廊が利用されたと考えられる。

通廊内部には、2 箇所で日干レンガの封鎖壁が検出された。一つは、残存する天井の東端のほぼ真下であり、空積みで最上層の上に作られている。おそらく、最後に利用された時期に作られた可能性が高い。もう一つは通廊内部中央付近にあり、こちらも空積みである。なお、この封鎖壁の奥（西側）には、北側の石壁を支えるように日干レンガの構造物が築かれている。石壁が内側に向かって歪み、崩落しそうな箇所に築かれていることから、古代における補強の痕跡と思われる。ヴォールト天井に覆われた通廊の南北には平行して石灰岩を積んだ壁体があり、通廊はちょうどこれらの壁体の中央に位置しているとみられる。ヴォールト天井に覆われた通廊は岩盤面に到達した部分で終わる。岩盤面には良質の板状の石灰岩製の門があった。石灰岩製の門のコーニスの上部の中央には、岩盤を穿った部分に墓碑とみられるステラ（石碑）が配されていた（図４）。ステラの図像は伝統的な古代エジプトのステラに描かれる有翼日輪と神々の姿で表現されているが、碑文はギリシア語である。碑文には「召使、メネラオス」という人物名が認められた。召使とはおそらく神の召使と考えられ、メネラオスは聖職者であるとみられる。ステラの前面には、岩窟部に由来すると考えられる木片、６体のテラコッタ製イシス・アフロディーテ像（図５）、

図４　メネラオスのステラ

図５　テラコッタ製イシス・アフロディーテ像

図６　デメテリアのステラ

図７　イシスアフロディーテとホルスの像

ローマンランプ、土器などが検出された。石灰岩製の門の前には、南北で向かい合うように置かれた石灰岩製のライオン横臥像が 2 体、古代に設置されたままの原位置で発見された。

岩窟部の長さは約 15m、幅は約 2.5m である。北壁から３つの副室、南壁から２つの副室と作りかけの部屋が穿たれていた。北壁の中央にはステラを嵌め込んでいた壁龕が１箇所認められた。このステラは壁龕の前に置かれていた木棺の内部に崩落しており、ギリシア語の碑文からデメテリアという人物に捧げられたものであることが判明した(図６)。南壁には 4 箇所にステラ、１箇所に壁画の描かれた木板が壁に嵌め込まれていた。ステラにはギリシア語の碑文が刻まれ、ギリシア・ローマ風の図像が彫刻されていた。また、北壁の側室への入口にはモルタルが塗られている箇所もあり、その上から漆喰が塗られ、彩色を施している部分も確認された。この前の部分からは完形のイシス・アフロディーテとホルスのテラコッタ像が出土した（図７）。岩窟部の奥にはシャフト（竪坑）が穿たれていた。入口側から砂層が堆積しており、その上からも人骨が確認されたことから、ある程度入口が開いていた時期があり、その後にも埋葬が継続されたと考えられる。砂層は奥に行くにつれて薄くなり、床面直上には壁際に人骨や木棺が配されていた。また、副室にもミイラの納められた木棺や人骨が積み重なった状態で埋葬されていた。その周辺には複数の完形の土器も確認された。

岩窟部の全体の把握は今後の課題ではあるものの、内部の大量の人骨、ミイラの埋葬から集団墓地であることは明らかであり、土器、テラコッタ製像、墓碑とみられるステラの年代から、発見された遺構はグレコ・ローマン時代のカタコンベであることが明らかとなった。また、カタコンベの外からは人骨やミイラが列をなして出土しており、カタコンベと同時代のグレコ・ローマン時代からコプト時代のものとみられる。また、周辺からは初期王朝時代あるいは古王国時代の日干レンガ製マスタバが検出されており、これらの本格的な発掘調査が待たれる。

（２）カタコンベ発見の意義

これまでエジプトでは、アレクサンドリアでプトレマイオス朝時代からローマ支配期に造営されたカタコンベが知られている。その中でも最も大規模なものは、2 世紀から 3 世紀に年代づけられるコム・アル＝シュカーファのカタコンベである。ローマ支配期におけるエジプトの埋葬習慣は地域性が色濃く、ヘレニズム文化の中心地であったアレクサンドリア以外の地域、特にテーベなどの上エジプトにおいては王朝時代の伝統が維持されていた。北サッカラ遺跡で発見されたローマ支配期のカタコンベは、アレクサンドリア以外の地域では初めての発見である。また大規模なローマ支配期の墓がサッカラ遺跡で発見されたのは初めてのことである。

サッカラ・ネクロポリスでは、プトレマイオス朝時代の終焉とともに、セラペウム、アヌビエイオン、ブバスティオンなどの動物墓地が使用されなくなり、衰退の一途を辿っていった。文献史料によれば、セラペウムは使用されなくなったものの、紀元後 170 年頃まで別の場所でアピス

牛の埋葬が行われていたという(Marković 2018: 197)。そして、紀元後4世紀の中葉からカタコンベの南に位置するアヌビエイオンの神殿中心部にキリスト教徒の集落が形成されたことが知られている(Jefferys and Smith 1988:23)。ローマ支配の開始によりサッカラ・ネクロポリスの宗教的景観が変化し、伝統的な古代エジプトの信仰が放棄されていく中で、メンフィスの人々の埋葬習慣、来世観の具体的な変容については依然として明らかではない。カタコンベは長期に渡って利用され、盗掘は受けているものの、比較的良好な状態で発見されており、今後の岩窟部内部のクリーニング調査によって重要な情報が得られるであろう。

（3）文化遺産の保存と活用の成果

本研究では、古代エジプトにおける埋葬の考古学的研究のみならず出土した貴重な文化遺産を十分に記録し、保存修復を行うことも大きな目的としている。発見されたカタコンベは凸版印刷株式会社の協力で三次元レーザースキャンで記録を行い、フォトグラメトリ（写真測量）でも３Dモデルを作成した。これらは研究のみならず文化遺産の活用の重要なデータとなる。また日干レンガ構造物の修復、補強、木棺のコンディション・サーベイ、壁画のコンディション・サーベイも行い、今後の本格的な保存修復作業のデータを獲得した。

（4）今後の展望

本研究の完了後に基盤研究(A)「エジプト、サッカラ遺跡の調査による古代エジプトの埋葬文化の変容に関する総合的研究」が採択されたことにより、本研究の継続と更なる展開が可能となった。今後のカタコンベの調査研究によりその全容を解明し、グレコ・ローマン時代におけるサッカラ・ネクロポリスの様相についての新たな知見を提供したい。また、周囲には王朝時代の墓の存在も確認されており、調査を進めていく予定である。今後は北サッカラ遺跡の考古学的発掘調査を通じた通時的な古代エジプトの埋葬文化の変容というより大きなテーマで本研究課題に取り組んでいきたい。

参考文献

河合 望 2017 「メンフィス・ネクロポリスの調査と研究」、常木 晃、西秋良宏、山内和也（編）、『西アジア考古学・最新研究の動向』季刊考古学第141 号、雄山閣、pp.83-86.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花 2017a 「第1 次北サッカラ遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23 号、日本エジプト学会、pp.127-144.

河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花 2017b 「第2 次北サッカラ遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23 号、日本エジプト学会、pp.145-181.

河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美 2018a 「第3 次北サッカラ遺跡踏査概報：踏査・測量・探査報告」、『エジプト学研究』第24 号、日本エジプト学会、pp.48-81.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美 2018b 「第3 次北サッカラ遺跡調査概報：試掘調査」、『エジプト学研究』第24 号、日本エジプト学会、pp.82-112.

河合 望、吉村 作治、柏木 裕之、高橋 寿光、米山 由夏、石崎 野々花、菅沼 奏美、サリーマ イクラム 2020a 「第4次北サッカラ遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.12-31.

河合 望、吉村 作治、近藤 二郎、柏木 裕之、高橋 寿光、米山 由夏、石崎 野々花、馬場 悠男、坂上 和弘、サリーマ イクラム 2020b「第5次北サッカラ遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp. 32-61.

河合　望 2020「サッカラ遺跡における新王国時代の墓地の分布と新たに発見された墓地について」吉村作治（編）『オシリスへの贈り物　エジプト考古学の最前線』雄山閣、2020年、pp. 30-39.

河合　望 2021「サッカラ遺跡　ツタンカーメン時代の墓の発掘に挑む」清岡央（編）『オリエント古代の探求　日本人研究者が行く最前線』中央公論新社、pp. 47-68.

D. Jeffreys and H. S. Smith 1988 *The Anubieion at Saqqara I: The Settlement and the Temple Precinct*. London: The Egypt Exploration Society.

N. Kawai 2020 “The Discovery of a Roman catacomb at North Saqqara,” *Egyptian Archaeology*, vol. 57, pp.10-15.

N. Kawai 2021 “A newly discovered Roman catacomb at North Saqqara: Recent results and future prospects,” In M.Bárta, F. Coppens, J. Krejčí, eds., *Abusir and Saqqara in the year 2020, Prague: Charles University*, Faculty of Arts, Prague 2021

N. Marković 2018 “Changes in Urban and Sacred Landscapes of Memphis in the Third to the Fourth Centuries AD and the Eclipse of the Divine Apis Bulls,” *Journal of Egyptian Archaeology*, vol. 104, pp. 195-204.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 河合望・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美・サリーマ・イクラム	４．巻 26
２．論文標題 第４次北サッカラ遺跡発掘調査概報	５．発行年 2020年
３．雑誌名 エジプト学研究	６．最初と最後の頁 12-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 河合望・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花、馬場悠男・坂上和弘・サリーマ・イクラム	４．巻 26
２．論文標題 第5次北サッカラ遺跡発掘調査概報	５．発行年 2020年
３．雑誌名 エジプト学研究	６．最初と最後の頁 32-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 河合望・高橋寿光	４．巻 27
２．論文標題 エジプト、北サッカラ遺跡の未知の墓地を掘る：ローマ時代のカタコンベの発見	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第27回西アジア発掘調査報告会 考古学から見た古代オリエント	６．最初と最後の頁 114-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂上和弘・馬場悠男	４．巻 26
２．論文標題 北サッカラ出土の短銃埋葬遺体の形質人類学的調査	５．発行年 2020年
３．雑誌名 エジプト学研究	６．最初と最後の頁 62-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 サリーマ・イクラム	4．巻 26
2．論文標題 2019年度北サッカラにおける動物遺存体とミイラに関する調査概報	5．発行年 2020年
3．雑誌名 エジプト学研究	6．最初と最後の頁 66-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Nozomu Kawai	4．巻 57
2．論文標題 The Discovery of a Roman Catacomb at North Saqqara	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Egyptian Archaeology	6．最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nozomu Kawai	4．巻 -
2．論文標題 A newly discovered Roman catacomb at North Saqqara: Recent results and future prospects	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Abusir and Saqqara in the year 2020	6．最初と最後の頁 331-346
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　7件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 河合　望
2．発表標題 The 2019 Season of the Excavation at North Saqqara: A Preliminary Report
3．学会等名 The 70th Annual Meeting of the American Research Center in Egypt, Washington D.C., USA（国際学会）
4．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 河合 望・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花
２．発表標題 第4次北サッカラ調査概報
３．学会等名 日本西アジア考古学会第24回大会
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 河合　望
２．発表標題 新王国時代の墓地を掘る：北サッカラ調査2015～2019年
３．学会等名 日本エジプト学会第39回定期研究会（招待講演）
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 河合　望
２．発表標題 第4次・第5次(2019年)北サッカラ発掘調査概報
３．学会等名 日本オリエント学会第61回大会
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 河合　望
２．発表標題 エジプト、北サッカラ遺跡の発掘調査について
３．学会等名 第61会北陸史学会大会（招待講演）
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 Nozomu Kawai
２．発表標題 Some Remarks on the Locations and Nature of the New Kingdom cemeteries at North Saqqara
３．学会等名 Prospects of North Saqqara: Egypt Exploration Society（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 河合　望
２．発表標題 エジプト、北サッカラ遺跡の発掘調査の意義と今後の展望
３．学会等名 金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」成果報告会「世界の文明を探る」（招待講演）
４．発表年 2021年～2022年

１．発表者名 河合　望
２．発表標題 エジプトのフィールドワークにおける新しい記録方法と研究成果のデジタル化について
３．学会等名 シンポジウム「研究環境の変貌と東洋学・アジア研究」 東洋学・アジア研究連絡協議会（招待講演）
４．発表年 2021年～2022年

１．発表者名 河合　望
２．発表標題 エジプトのフィールドにおける考古学・碑銘学の新しい記録方法について
３．学会等名 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）第3回 協働型アジア研究オンラインセミナー「古代エジプト資料の記録、分析、利活用を考える」（招待講演）
４．発表年 2021年～2022年

１．発表者名 Nozomu Kawai
２．発表標題 Excavating the first Roman catacomb at Saqqara
３．学会等名 Egypt Exploration Society Online Lecture（招待講演）
４．発表年 2020年～2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 清岡 央	４．発行年 2021年
２．出版社 中央公論新社	５．総ページ数 240
３．書名 オリエント古代の探求	

〔産業財産権〕

〔その他〕

国内報道
エジプトのサッカラ遺跡で初めてローマ支配期の カタコンベ(集団墓地)を発見!
https://www.kanazawa-u.ac.jp/rd/73849
金沢大学河合教授らの調査隊が、エジプトのサッカラ遺跡で新発見
https://univ-journal.jp/29031/
古代エジプト遺跡にローマ時代のカタコンベ　初の発見
https://www.asahi.com/articles/ASMCF30S8MCFPJLB001.html

海外報道
Catacomb With Mummies From Ancient Egypt's Roman Period Discovered in Vast Burial Ground
https://www.newsweek.com/catacomb-mummies-ancient-egypt-roman-period-vast-burial-ground-1471792
Roman Catacomb Discovered in Egypt
https://www.archaeology.org/news/8180-191113-egypt-roman-catacomb
Roman-era catacomb discovered at Saqqara...
http://english.ahram.org.eg/NewsContent/9/40/355751/Heritage/Ancient-Egypt/Romanera-catacomb-discovered-at-Saqqara-necropolis.aspx

TV番組、DVD
National Geographic, Lost Treasures of Egypt Season 2
https://www.youtube.com/watch?v=DXQopLatiTE&t=1469s
https://www.amazon.co.jp/Lost-Treasures-Egypt-Season-DVD/dp/B08RQSLLLZ

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	近藤　二郎 (Kondo Jiro) (70186849)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	坂上　和弘 (Sakaue Kazuhiro) (70333789)	独立行政法人国立科学博物館・人類研究部・グループ長 (82617)	
研究分担者	覚張　隆史 (Gakuhari Takashi) (70749530)	金沢大学・古代文明・文化資源学研究所・助教 (13301)	
研究分担者	馬場　悠男 (Baba Hisao) (90049221)	独立行政法人国立科学博物館・その他部局等・名誉研究員 (82617)	
研究分担者	阿部　善也 (Abe Yoshinari) (90635864)	東京電機大学・工学研究科・助教 (32657)	
研究分担者	高橋　寿光 (Takahashi Kazumitsu) (30506332)	東日本国際大学・エジプト考古学研究所・客員教授 (31604)	
研究分担者	柏木　裕之 (Kashiwagi Hiroyuki) (60277762)	東日本国際大学・エジプト考古学研究所・客員教授 (31604)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	吉村　作治 (Yoshimura Sakuji)	東日本国際大学・経済経営学部・教授 (31604)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岡田　靖 (Okada Yasushi)	東京藝術大学・美術学部・准教授 (12606)	
研究協力者	前川　佳文 (Maekawa Yoshifumi)	独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・主任研究員 (82620)	
研究協力者	高橋　亮介 (Takahashi Ryosuke)	東京都立大学・人文社会学部・准教授 (22604)	
研究協力者	リンディ・ヌゾッロ　カルロ (Rindi Nuzzolo Carlo)	イェール大学・近東言語文明学科・研究員	
研究協力者	フルカデイ　イグナシオ (Forcadell Ignatio)		フリーランスの保存修復土木建築家
研究協力者	レシェトニコワ　ナジェシダ (Reshetnikova Nadezhda)		フリーランスの保存修復土木建築家
研究協力者	苅谷　浩子 (Kariya Hiroko)	シカゴ大学・オリエント研究所・保存修復家	
研究協力者	村串　まどか (Murakushi Madoka)	東京電機大学・工学部・研究員 (32657)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岡部　睦 (Okabe Mutsumi)	金沢大学・人間社会環境研究科・博士後期課程 (13301)	
研究協力者	イクラム　サリーマ (Ikram Salima)	カイロ・アメリカン大学・エジプト学科・教授	
研究協力者	ユーセフ　ムハンマド (Yousef Mohammad)	エジプト観光・考古省・サッカラ査察局・次長	
研究協力者	ファラグ　サブリ (Farag Sabri)	エジプト観光・考古省・サッカラ査察局・局長	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
エジプト	エジプト観光・考古省	カイロ・アメリカン大学		